

古典の季節の歌 (平成十二年二月十二日 最終講義)

滝澤 貞夫

今日は、信州大学での私の最後の講義です。これ迄二八年間、私はこれから教壇に立つ学生諸君にとつて、必要だと思ふ事柄を毎回繰り返して、講義して参りました。でも、今日はお許しをいただきまして、今、あれこれと私が考えております事を自由に喋らせていただきます。

お手元のプリントをご覧ください。志貴皇子の権の御歌一首「石走る垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりけるかも」誰でも知つている、万葉集を代表する歌です。明るい水量豊かに流れる春の小川を彷彿とさせるようなリズム。垂水は今いう滝です。四句の暢びやかな盛り上がりから、春を迎えた慶びを、読む人は皆志貴親王と共に感じ、千二百年の間、誰もが季節の到来に共感して来ました。その感激を最も手際よく、美しく解説しておられると思います橋本達雄氏の文章をプリントしました。「清冽な垂水のほとり、春の到来を告げるさ蕨の芽立ち。この景が湧き上がるような懼びのリズムに乗つてよむ人をとらえる。こ

こには万葉ぶりの到達しためざましい創造のひとつがある。」と、この歌のすばらしさを豊かに解説しておられます。最近、学会では、懼びの内容に注目し、春の到来の喜びとするこれ迄の見方に、更に親王の加封が昇進を重ねて考える見解の是非が問題にされています。しかし誰一人として、早春の到来を歌っている事を疑うような研究者や注釈家はありません。ところで、皆さん。蕨は、春一番に芽を出すでしょうか。春の七草にも勿論入つておりません。晩春、今日の暦で四月の末にならなければ芽が出ないのではないのでしょうか。決して蕨は、春、最も早く芽を出すような植物ではありません。その上、この歌に詠われるような滝の傍りは、水が気化し熱が奪われる為、いつも冷え冷えとしていて、真夏でも一番涼しい場所です。そんな所の蕨の発芽は一番、遅れる筈です。ところが、この蕨は、春最も早く芽を出す草などでない事に気付いておられる先人は、私の知る限り、わずかに沢瀉久孝博士だけで、「蕨の出るのは陽春の頃であつて、旧暦といへども

正月に蕨が萌え出るといふのはをかしいのであるが、その不自然に気づかないところに王朝の歌人の心があつた」と『万葉集注釈』の中で触れておられるに過ぎません。しかし博士も、早春、春が来たことを詠む迫力、誰もが共鳴できるすばらしい表現を礼賛した中で、ちよつと但し書きふうに触れられたに過ぎません。沢瀉博士が言われるように、この「石走る」の歌は、春一番の詠として古今六帖、和漢朗詠集、さらに新古今和歌集に迄収められていきます。そして「昨日迄冬（きのうのふゆ）もれりし浦生野に蕨のとくも萌えにけるかな」と大中臣能宣が詠い、あの俊成迄が、「雪消えて下萌えいそく飛火野の折にあひぬと見ゆるさ蕨」と、立春になるとすぐ芽を出すと皆が詠い出す仕末です。平安中期以後は、蕨のピを、火（か）と認め、火から煙を導き出し、春を迎える野焼きに結び付け、春まだ浅い野原に生え出た下蕨（したあし）を詠つたりし出します。この様に、この「石走る」の春の到来の慶びが、後々まで影響を及ぼしているのです。でも、この春は、絶対に早春、春の到来の歌ではなかつた。これだけは確かだと言えるのではないのでしょうか。

ところで、この「石走る」と同じような、立春・立秋でない時期を、恰も季節の到来と詠う歌が『万葉集』には幾らもあるのです。判り易い例をプリントして見ました。ご覧下さい。「人皆は秋を秋と言ふよし我は尾花が末（すえ）を秋とは言はむ」。世間の人は皆、萩こそが秋を告げる花だと言う。えい、かまうものか、私

は薄の穂先だつて秋らしいのだと言おう。立秋は、普通八月八日です。ところで京都での萩の開花日は八月三〇日。満開になるのは九月一二日です。この歌は『万葉集』ですから、奈良ではどうかが問題でしょうが、立秋と萩の花には、およそ一ヶ月も差があるというのですから、同じ関西の南北の盆地同志ですので、大勢には関係なく通用すると思います。薄の穂が出るのは、更に少し遅れて九月一〇日前後です。この歌の作者が秋を感じるのには、世間の人は萩が咲く時、自分はススキの穂が出ると、もつとも秋という季節を感じているというのです。こういう作者ですから、萩や薄が咲く時、秋が来たと言つていいのではないのでしょうか。次「春されば木隠り多み夕月夜おぼつかなしも山蔭にして」春になると木の蔭が多くなるので、折角の宵の月もすつきりと姿を現わしてくれない。こんな山蔭に住んでいと。立春は、二月五日です。落葉樹が芽吹き、月がはつきりとは見えなくなるのは、四月二十日頃。とすると、この歌の作者は、なんと立春から三ヶ月近く、夏も間近な景色に春の季節を感じ、「春されば」即ち春になると、と詠んでいるのです。次。「春されば卯の花腐し我が越えし妹が垣間は荒れにけるかも」。春になると花が咲いた卯の花の垣根を台無しにして、せつせと潜り抜けた彼女の家の垣根のすき間は、今見るとすっかり葉や枝が茂つてしまつている。御承知のように、卯の花は、小学唱歌で、「夏は来ぬ」の歌い出しの歌詞にもなつていて、第一、夏の月名、卯月にもなつている花

です。そんな卯の花の咲く頃を、この歌の作者も「春されば」つまり春がやつて来ると詠っています。「春さればすがるなす野の時鳥ほとほと妹に逢はず来にけり」。春になると、じが蜂が飛び交う野の時鳥の名のように、あやうくあの娘に逢わずに来てしまふところであつた。この歌は、『万葉集』巻一〇の、夏の相間に収められていますので、時鳥は夏の鳥として扱っています。そうすると「春されば」は、じが蜂の飛び交う時期を言っている事は確かです。この辺諸説が錯綜し、すがるなす野を地名とする考え方もありまして、はつきりしません。スガルは秋の野に飛び交うと詠う歌も他に存在しますが、虫の活動が眼に付き出すのは、三月一八日前後です。この「春されば」も、立春から四〇日も経っています。次、「春さらばかさしにせむと我が思ひし桜の花は散り行けるかも」。春が来たら髪に挿そうと私が思っていた桜の花は散つてしまったことだなあ。この桜、山桜として、開花日は三月二九日、満開は四月四日です。八重桜ならもう少し遅くなりますが、この歌の場合も、立春から二ヶ月も遅い春の到来が堂々と詠われております。一方秋についても、「秋さらば置く白露に我が門の浅茅が末葉色付きにけり」。秋になると置く白露のために、わが家の門の辺りの浅茅の葉の先までがすつかり紅葉になつてきたなあ。路傍の、背の低い雑草迄色付いたというのですから、それはもう初冬と言つても良い。一月の初旬か中旬になつてからだと思われます。カエデの紅葉し始めるのが一月五

日なのですから。立秋からは、この「秋されば」「秋がやつて来ると」は三ヶ月も過ぎてのこととなります。「秋されば春日の山の黄葉見る奈良の都の荒るらく惜しも」秋の季節がやつて来ると毎年春日の山の美しい紅葉を見て楽しんできた。その奈良の都が荒れてゆくのは何とも惜しくてならない。この歌の場合も、前の歌同様に、紅葉になると秋が感じられるというのですから、この場合も立秋からは三ヶ月、九〇日も経っています。「秋さらば今も見るごと妻恋ひに鹿鳴かむ山ぞ高野原の上」秋になつたならば、今見ているように妻を恋ひ慕つて鹿が鳴く山となるであろう。この高野原の辺りは、さ雄鹿が雌を慕つて鳴き出すのは、早くても八月三〇日以後。この歌でも、秋の到来は立秋より二〇日以上も遅い事になります。次、「秋されば置く露霜にあへずして都の山は色付きぬらむ」。秋が来ると、相次いで置く露に耐えかねて都の山々は色付いたのであろう。この歌も立秋から三ヶ月も隔たつた秋の到来です。「こほろぎの待ち喜ぶる秋の夜を寝る験なし枕と我と」蟋蟀が待った効があつたとばかり喜んで鳴いている秋の夜なのに、寝る効もありはしない。枕と私とは。蟋蟀が鳴き始めるのは、エンマ蟋蟀で、八月一五日。鳴く最終日は一月一五日です。蟋蟀のしきりに待つていた秋も、早くても立秋よりは一週間はずれていて遅いのです。最後の「めづらしき君が家なる花すすき穂に出づる秋の過ぐらく惜しも」。懐かしいあなたのある花薄が、このように美しい穂を出している秋。この秋

が過ぎて行くのは何としても惜しいことだ。先にも申しました様に、薄の穂は九月一〇日頃にならないと出て来ません。「花薄穂に出づる秋」とは、立秋と一ヶ月以上隔つておりました。

このように見て来ますと、万葉人の歌っている季節の到来とは、現在我々が常識として立春とか立秋を指して言っているとは、どうも違うようです。個人個人が具体的に季節を感じ取れる草花や鳥・動物、辺りの光景が、一番その人がすばらしいと感動する様子になった時だつたと思われます。こちらが待ちに待つて、そうなつてゐる事を発見するのではなく、自然から感動させられる。心打たれ、感激が結晶し、自然から歌わされたもの、それが万葉の季節の歌だつたようです。それに対し、現代の私達の季節は、すっかり暦の概念に占領されてしまい、例えば、今年暖冬だとか雪が少ないとかだけ言い合います。そして、大幅な三ヶ月の春の概念の一部として、梅が咲き、桜が花開き、鶯が鳴くと理解します。これらは、春という季節の重要な概念の内容だと理解します。そして、その考えに立つて、梅が咲く時期とか、桜の咲いた折とかと言います。それは時期とか折という、空虚な区切りだけを表す言葉でしかこうした自然現象を把るところを出来なくしているのです。ところが未だ暦の概念が、このように浸透していなかった万葉人は、梅の開花、桜の開花を目の当りにして、そこに豊かな具体的な季節を感じ取っていたのです。そしてこのような暦普及以前の季節観は、ここに抽出しました歌

だけでなく、広く万葉人の基本的な感じ方だつたと思われます。ところで一つ一つ具体的裏付けを持った梅の咲く春、桜の散る春、これは春は春でも随分その雰囲気とか、背景は違つて感じられるのではないのでしょうか。その上、梅の咲く春からは、中国文化、エキソチックな雰囲気が感じられ、桜咲く春からは、純日本風の春といつた具合に、いくらでも季節の感覚が含らむ中味の探求が可能でありました。具体的な裏付けがあつて、その場その場その都度、生き生きと把握されるのが、万葉人の季節感でありました。こうして万葉人は、一年の中で、幾つも幾つもの春を豊かに迎え、その都度感動してゐました。草花や花木、動物、辺りの光景の変化が担つている季節感を最大限、その一つ一つ対象の中から汲み取り、彩り深く把握してゐたのです。今日では忘れ去られ、誰もが気付きませんが、この最も素朴で、考えてみれば、全く当り前な、自然に対する感動のあり方、それを万葉人は素直に身に付け実践してゐたのであります。

ですから、逆に、暦の立春とか、立夏を今度は歌おうとする場合には、プリントをご覧下さい。「春過ぎて夏来るらし白妙の衣干したり天の香具山」。有名な持統天皇の歌のような言い方が必要になります。歌調といい、鮮明な明るい内容といい、寸分の隙もなく、正に初夏を見事に結晶し得た傑作です。しかし私はこれ迄どうも「春過ぎて夏来るらし」が冗漫で、この名歌にはそぐわないと氣になつて仕方ありませんでした。今日、こんな事を

お喋りする、これはきつかけの一つになりました。最近、もう二、三年前になりましたか。『和歌文学大系』の注で、稲岡次氏がこの歌の注として「暦法の施行にともなつて季節観も深まり」と鋭く、言及されたように、律令制の施行つまり暦法による日々の生活が、何月何日と位置付けられる背景があつて、始めて夏という季節が認識されるようになりました。それ迄、日本人は秋を好み、その半分位春に関心を持っていました。夏や冬は、嫌われこそすれ、関心など誰も持っていませんでした。この歌は、暦によつて始めて歌われた初夏の歌です。こういう季節の移り変わりに眼を向けたのは「人麻呂歌集」で、その影響も考えられるのであります。私は、この歌は、抽象的な想像の歌等ではなく、飽く迄写実的眼前の光景を、持統天皇が藤原京の宮殿の中で詠じられたものと考えたいと思つています。「白妙の衣干したり」は、春の神事が明けた朝、それ迄神官が身に纏つていた白い斎服を、青々と若葉が生い繁る緑の山に干したのだらうと想像します。「筑波峯に雪かも降らる否をかも愛しき児らが布ほさるかも」の東歌との影響関係を考える方もおられますが、多分この持統天皇の歌の方が古いのでしようから、この東歌とは関わりがないと私は理解しているのですが。とに角、立夏の頃を歌おうとすれば、暦の通りに、わざわざ「春過ぎて夏来るらし」と言う必要があつた。この名歌はそんな事情を我々に伝えていたものと思われまふ。しかしこの点はこれ迄誰も採り上げておりません。次。

「冬過ぎて春し来れば年月は新たまれども人は古りゆく」。冬が過ぎて春がやつて来ると、年も月も新しくなるが、人だけは、ただ年毎に古びてゆくばかりだ。この歌は、恐らく、初唐の劉希夷の、年老いたことを歎く、歎旧の詩「代白頭吟」の「年々歳々人相似たり」「歳々年々人同じからず」辺りの漢詩の影響による歌かと思われまふ。当時は、正月が来ると、一つの齢を取るのので、一層この歌の感じは実感されたものと思われまふ。平安時代以降でしたら、「春は来にけり」または「春されば」で十分言い尽される筈の新年、或いは立春が、「冬過ぎて春し来れば」とわざわざ言わなければ、暦の施行されたばかりの頃は、通じなかつたようです。万葉人の、春や夏とは、一つ一つ具体的な裏付けのある感覚で、三ヶ月にも及ぶ長い期間を意味する概念ではなかつたのですから。次、「今よりは秋付きぬらしあしひきの山松陰にひぐらし鳴きぬ」。今から秋となつたらしい。(あしひきの)山の松陰で鶯が鳴き始めた。「三冬継ぎ春は来れど梅の花君にあらねば招く人もなし」。冬の三ヶ月間が続いて、春は来たけれど、梅の花よ、そなたのほかには、招く人ともないわ。そして、大伴家持も長歌の中の一節ですが、「春過ぎて夏来向かへば。足引の山呼びとよめ。さ夜中に鳴く時鳥。初声を……」と詠んでいます。これらの歌は、万葉人の感じていた春、夏、秋、冬が、現在の我々が持つ、一年を四等分した期間だけの概念ではなかつた。一つ一つ具体的な実感を持った春であり、秋であつた事を、

その違いを最も端的に現わしている現象だと思えます。曆がただん人々の意識にも浸透して行つても、大部分の万葉人の心の中には曆が普及する以前の素朴で、それぞれ味わいのある季節感が生きづいていたのではないのでしょうか。皆の春なら春という言葉の受け止め方が、曆に統一されていないとなると、こんな冗漫とも後世受け取られる表現が、曆の立夏、立秋、立春を言う場合には必要だつたのです。こんな「春が過ぎて夏が来る」「冬が過ぎて春になる」と、三文字の中でもわざわざ歌うことは、流石に曆が普及した平安時代以後の歌には全く見られなくなりま

す。

このように万葉人の季節を理解しますと、最初に採り上げました「石走る」の歌の春も、蕨の萌え出る春だと考えられます。蕨の春は、もう桜の花が咲き出した後の頃です。蕨の春は、寒さなど全く感じられない、正に陽春という事になります。春、まつ盛り、明るく、うっとりとなる暖かき。辺りは臙ろに霞み、人肌にはさわやかさすら感じられる。これこそ文句のない完璧の春と言えます。こんな蕨の春の到来を、作者志貴皇子は、活き活きと大きな感動を伴つて歌つたのだと理解することが出来ます。ましてや志貴親王は、上へはとにかく、反持統の生涯を貫いた人です。曆法など持統天皇が次々と押し付ける律令体制の下で、それを最初に受け入れるべき立場にありながら、曆の概念を敢然とはねのけ、曆法施行以前の旧来の自然観、四季の受け止

め方で蕨の春の到来を堂々と歌い上げたのです。志貴親王の立場からすれば、このように季節の到来を歌いあげるには、親王の全智全慮をかけて、命がけて歌い上げたと言えます。それが、我々読む者に激しい迫力で迫つて来る、つまり親王の人生。生き方の力、その全てがこの歌の表現に込められたことから感じ取られると解されてきます。

このように万葉人は、季節を感じさせる草花や鳥・動物などによつて、それぞれが持つ季節を、〇〇の春、〇〇の秋と捉えて、味わいの異なる季節の感動を味わつておりました。ひたひたと波が寄せる如く、季節が深まるにつれて、幾重にも幾重にも感動し、その時その時の季節を各人がそれぞれ味わつていたのであります。一方では季節感の把握を、こうした個々の経験の積み重ねの結果からでしょうか。特に曆法の体制が滲透して、季節の推移という観点が確立して、それが核となつたからでしょうか。逆に觀念、そして作者の頭の中に既に出来上つている知識によつて季節感を安易に理解しようとする接し方が現われて来ました。そして曆の普及と共に、この季節感覚が和歌の詠法に取り入れられ、この様な歌が、次第に主流を占めるようになってきました。つまり、季節の受け留め方に、旧来通りの感動から、新しい觀念へと全く異なる、吸収から確認へと、いわばプラスとマイナスの正反対な接し方が共存することになりました。この觀念の実態については、昭和二十一年一月、京都印書館から発行されました四賀光子氏

の『伝統と和歌』の考え方が大変良い参考になると思います。四賀光子氏は、まず鶉を採り上げ、和歌に扱われた鶉について、万葉集では、いずれも古ると言う詞の序詞（しよご）の中に使われていることを明らかにされ、鶉の習性から見て、草深い、荒れ古したイメージの鳥と見なされ、平安時代以降は現実を離れて、鶉なくと読めば、荒れた場所との観念形態が形成されたと言いつておられます。同様に、鹿は、秋萩を恋し、秋萩を妻として惜しんで啼くと理解され、平安遷都の後は、鹿はそんなに都に入つて来なくなつたので、現実的な感覚は薄れ、この観念形態で、見たことも聞いたこともない鹿を、恰もまざまざと目撃し、興味を抱いているかのように詠んでいとされました。更に、水についても、水性状やコオリという発音から連想されることとして、人の心が結ばほる、とけない、つめたい、という状態の比喩として歌われると指摘されます。これも水そのものから遊離し、その性状だけが抽出されて観念形態を形成した場合も採り上げられました。四賀氏が説かれる観念形態、この外にも事例がありますが、一つ一つ尤もで納得できる内容だと思われます。但し、氏は単純に『万葉集』で歌われている用例を帰納し、それによつて、平安時代の歌は、現実から遊離し、観念だけで歌われているとして、観念形態という用語で具体的に把握され説明されるという論証を繰り返されました。しかし、題材によつては、四賀氏が明確には言われなかつた『万葉集』の歌の中にも、既に観念による詠歌が

明らかに試みられています。その最も顕著な例は、七夕の歌だと思ひます。現実から遊離し、観念の世界で、天上の恋をあれこれ空想し、そのロマンを描く歌が『万葉集』の巻一〇を中心に、百首以上も歌われているからです。もつとも、七夕は中国から伝來した伝説を歌うもので、人麻呂歌集の歌が大部分で百首近く、それ以外は、山上億良の詠んだ養老年間の歌や、神龜天平の歌が認められるに過ぎません。秋の歌です。この七夕を含め、季節の歌が歌い出されるのは、大体万葉第二期、持統天皇や柿本人麻呂の活躍した頃からと、阿蘇瑞枝氏は指摘しておられます。このように、観念による詠歌は、暦の本格的な施行時期と時を同じくして詠まれ出し、暦の時の刻みを柱として、七夕の歌のようにその幾つかは成り立つたようです。そしてこれは万葉第二期以後次第に多くの歌人に受け入れられ試みられるようになって行きました。万葉集の時代でも、後半になればなる程、流行して行つたと思われます。なる程、既に共通の傾向が歌材によつて認められるという事は、勿論景物の性状や特徴を把える写實的な詠み方から、先にも申しました、例の「白妙の衣干したり」の歌で、東歌との関係が云々されるように、既に詠まれた歌や既製の表現を十分意識し、お互いに影響し合っている場合が十分考えられるからです。もつとも私は、「白妙の衣干したり」の東歌の影響関係には否定的ですが、全般的には万葉集に認められる数多くの類似歌・類想歌の存在は、こうした互いの影響を、抜

きにしては考えられません。ですから、景物を見る前に、既に意識として観念が働いている場合が十分考えられます。一体、詩歌とは、ある景物の一部を切断し、歌おうとする世界のみを採り上げ、決して全体を問題にはしないジャンルです。例えば、桜の木は、一年中さまざまな姿を我々に見せているのですが、青葉の生い繁った姿、紅葉の桜。葉がすっかり落ちてしまった桜。そんな中で、一年の中でたった十数日の間、山桜の花が咲き出す、そしてやがて散って行く。この間だけが歌の対象となり、他の三三四、五十日間の桜は無視され、歌われないのです。このように、詩歌は、本来持つている基本的な性格から、一つの題材が何度も詠まれると、必然的に共通点の多い観念形態が出来てくるのは、当然といえば当然のことでしょう。四賀氏が言われる観念形態とは、見たことのないものでも活き活きとそれを歌の中に詠み得る程の豊かな観念の内容を意味していると解されます。実際このようにして、平安朝以降の歌の多くは詠まれていたのだと思われます。そして、だんだん、後で申しますが、この観念形態でしか歌は詠んではならないという規制にまでこの詠み方が徹底していきます。人々はこの観念形態を、本意とか本情と別の専門用語で称するようになって行きます。

さて、もつぱら頭の中で観念によつて歌が詠めるとなれば、中には眼の前の現実から、全くかけ離れた観念形態をこしらえてしまう場合も出て来ました。その代表的な事例は、中

国詩が持つていた観念形態をそのまま日本の詠歌の場に持ち込んだ「鶯」のような場合です。中国では、古く「毛詩」に、春になると鳥は深い谷を出て高い木に降り住むと歌われておりました。そして唐の時代になりますと、それ迄漠然と「鳥」とありましたものを、鶯と限定し、これを「谷の鶯」と見なし、早春の季節感を積極的に描く題材とすることが流行しました。この辺の事情は、人文学部の渡辺秀夫先生が実に明快に解き明かされた処です。しかし、この谷の鶯は、『早春賦』として幾ら今日迄歌い継がれたとしても、これは飽く迄も現実を無視した観念の世界での事に過ぎません。日本の現実の鶯は、人なごこく我々のすぐ近くに一年中飛び廻っているのです。低い竹藪や繁みの中に果喰つて、石を叩くような変な鳴き声を出しています。変な見劣りする雀といった感じの鳥です。石を叩くような鳴き声は、笹鳴と云うのだそうです。そんな鶯が、春も中頃、白梅が開化して一〇日も過ぎた頃、最初は下手つくそで、それも半分位迄ホーホと鳴き出します。そして何日か練習して、あのホーホケキョと、美しい鳴き声に変わるのです。実際の鶯は、春になると山から里に下ってくるのではなく、全く逆に、春が終わる頃、山へ避暑に出かけます。皆さんご存知のように夏我々が山へ行くと鶯は盛んにさえずっています。鶯が再び人里へ戻ってくるのは、暑さが去って秋になつてからです。だから、春告げ鳥とは、全く現実からかけ離れた観念の上だけの、それも異国のものではないかと云う



た。もつともこの観念形態は、平安時代の初期に輸入されましたので、万葉集には全く見られません。万葉集の鶯は、「百済野の萩の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけむかも」。のように、現実の姿で詠まれたり、雪・柳・梅・竹・卯の花などと共に詠まれたり、梅と鶯というような組み合わせも、まだ固定してはおりません。もつとも谷の鶯は、三代集で流行しますが、後で触れるように、だんだん詠まれなくなりますが。また、組み合わせと言えば、万葉集でも、観念形態として、何月何日頃現れるという観念が固定してくると、その現れる時期が一致している場合、二つ以上の景物の組み合わせられた歌もしばしば歌われるようになります。大体、観念形態は、現れた時期が歴法が社会に施行された時期が、歴法が社会に施行された時期と重なるからでしょうか。そして暦が、今後あるべき人々の生活とか時刻を決めようとするものであり、一方詩歌の世界でのこの観念形態も、また自然現象のあるべき姿を具体的に決めるという共通性を持つていたのではないでしょうか。共に当為、あるべき理想の姿を示すという点で、暦が示す時、日月の区分と、この観念形態とは共通の意識の上になり立っていたと言えます。そこで暦に多分に影響された為か、観念形態の内容の一部として、これまでの日本人が、この講義の最初に触れました、静止してありのままに把えた季節観に対し、推移の、移り変わりの季節感、暦の流れに沿う、これ迄に無かった季節感へと変化しました。古い日本人は、充実した実りや美し

い秋をそれぞれ感じ取って、秋を満喫していました。それに対し、観念形態は、充実した秋の感覚の中で、充実がやがて崩れ去り衰弱するという変化の兆候を鋭く感じ取るうとの傾向を持ちました。観念形態は、時の流れ、その先の状態をいつも背負う感覚に変化していきました。こんな観念形態が古い季節感を凌駕しますと、同じ時期に現れる別の題材に対して、今年はず早く現れたとか、遅いかということが歌になるという現象が現れ出します。プリント一枚目の最後の歌の集団をご覧ください。「この夕秋風吹きぬ白露に争う萩の明日咲かむ見む」。今宵涼しい秋風が吹き始めた。早く咲け、早く咲けとばかりに置く白露にこれ迄逆らっていた萩が明日はいよいよ咲くだろう。それを見よう。萩は、前にも触れましたが、八月三〇日前後に咲き出します。それを知識として知っていて、その日になったので、いよいよ咲くだろうと予測して歌っているのです。こんな事が歌えるのは、暦の知識と観念形態の内容が共存して可能としたからだと言えます。次、「秋の田の我が刈りばかの過ぎぬれば雁が音聞こゆ冬かたまけて」。秋の田の私の持場を刈り終えた折しも、雁の鳴き声が聞こえて来た。もうすぐ冬だとはかりに雁の声を晩秋の景物と取り合わせています。例年、雁が飛んで来るのは一〇月二〇日頃です。田圃の仕事も、もうすつかり終わっている時期、厳しい冬の到来を予告するかなような雁の鳴く声を、この作者は、もう冬がいつ来てもかまわないと安堵しているのではないのでしょうか。「夕立の雨

降るごとに春日野の尾花が上の白露思ほゆ」。夕立の雨が降るたびに春日野に咲く薄の穂先にキラキラと美しく輝いていた白露のことが思われる。薄の穂は、九月一五日辺りで穂を出します。しかし、夕立、これは、さっと降って又さっと晴れ上がる現在の時雨を言っているようです。つまり、秋が深まるにつれて降る天気雨です。その雨が上がつて、薄の穂についている雨滴あめりづ、それが折しも輝きを出した太陽に光り輝いているのです。この作者は、こんなハツと息を呑むような美しい光景をかつて眼にしました。それ以来時雨が降るといつも、あの春日野の光景が自然に眼に浮かぶと歌っています。これも或る時期がやってくる、決まっていますか。次は大伴家持の歌です。「我がやどの花橋を時鳥来鳴かず地に散らしてむとか」。我が家の庭にせつかく咲いた橋の花を、時鳥よ。お前が来て鳴かないままで、無駄に地面に散らしてしまおうというのか。いかにも花好きな家持らしい歌です。そして、ここには、時鳥は当然橋の花の咲く枝へ飛んで来るものと、家持は決めてかかっています。いや、時鳥を男性、花橋を年頃の女性と観念の世界で組み合わせ、男に捨て去られ、空しく生涯を閉じようとしている薄幸の姫君といった感じさへも歌の中に漂わせています。こうした、花橋と時鳥の組み合わせは、平安時代の和歌にそのまま受け継がれ、更に数多くの歌が、この枠の中で歌われるようになります。次、「さき雄鹿の妻ととのふと鳴く

声の至らむ極みなびけ萩原」。さき雄鹿が妻を呼び寄せようと鳴く声の届く果て迄いつせいに靡け、萩原よ。この歌もさき雄鹿とその妻は萩の花だとする組み合わせに基づいて、現実無視の観念の歌になつていと言えます。次の歌は、山上憶良の七夕の歌です。「秋風の吹きにし日よりいつしかと我が待ち恋ひし君ぞ来ませる」。秋風が立ちはじめた日から、いつ来て下さるかいつ来て下さるか、私が待ち焦がれていました。そのあなたが、いよいよおいでになりました。こうした七夕の歌は、一〇〇首以上もあります。が、暦の七月七日を意識して観念の空想の世界に遊んでいる歌と言えます。さて以上の歌の中に既に見られる二つの景物の組み合わせは、万葉集では先に述べました鶯の飛んで来る木が、梅ばかりでなく、竹もあり、柳もありであったように、まだ観念形態は流動的ですが、平安時代に入ると、これらの組み合わせの中の幾つかが固定して来ます。鶯は梅に飛んで来なくては歌にならなくなり、鹿も萩の原で妻を慕って夜鳴く鹿だけが問題で、群を離れた一匹だけで淋しいと鳴く鹿とか、或いはもてもててもう雌は沢山だとぼやいているのかも知れません。昼間は鳴いても歌にはなりません。鹿はいつでも鳴きたい時に鳴いてるのでしようが、でも歌は妻恋の鳴き声しか認めないのです。ところで観念形態が固定したかどうかで、歌っている世界が全く違つて理解されてしまう場合も、ままあります。例の舒明天皇、万葉時代の天皇はこの天皇から始まるとされる天皇の名歌などがそれに当

たります。「夕されば小倉の山に鳴く鹿は今宵は鳴かず寝ねにけらしも」。この歌は、巻九の巻頭歌では、雄略天皇の御製となつています。この点からこの歌、古くから伝承されて来た歌で、舒明天皇の御製というのでも或いは仮託されたものかも知れません。とに角、万葉第一期の古い歌かと思われます。これ迄申しましたように観念形態は、万葉後期、奈良に都が置かれた頃からはっきり認められるようになって来るのです。「我が岡にさを鹿来鳴く初萩の花妻どひに来鳴くさを鹿」と太宰帥大伴旅人が歌いますが、万葉集に見られる鹿四一例の中、萩が同じ歌の中で詠まれるのは五分の一の、一〇首に過ぎません。ですから、宵闇の中で萩の花妻を求めて鹿は鳴くという確固とした観念形態は、万葉後期、さを鹿の語で詠出された歌だけ、万葉前期に確立していたとは考えられません。鹿の古い歌の中には、柿本人麻呂の作と言われる巻九の歌に、「秋萩の妻を巻かむ」と詠まれている一首が萩と鹿を詠んでいるに過ぎません。だとすると、舒明天皇作と一応見なすとすれば、人麻呂の歌で例え観念形態らしきものがもう既に形成されていたとしても、この歌はそれより更に古い歌ですから、時期的に見て、後世の鹿の観念形態とは全く関係のない詠歌だと断言してよいと思われます。夕暮に鹿が鳴いたからといって、無理矢理観念形態の枠の中で理解し、妻を求めていると決めつける訳にはいかないと考えられます。昼間、宮殿の周りにいたあの可愛い鹿なのだろう。奥深い森閑としてお暗く物

音一つ聞こえて来ない今宵、カーヒョーと長く尾を引き、澄んだ哀調を帯びた声はどうしたのだろう今宵はまだ聞こえて来ない。もう眠ってしまったのかと、毎晩聞かされる鳴き声に心傷めていた天皇は、今宵はやつと休んだと、恰も母親・子煩悩の父親の気持ちでホツとしている歌だろうと思えます。斎藤茂吉は「万葉秀歌」で、「調べ高くして潤いがあり、豊かにして弛まざる、万物を同化包摂し給ふ親愛の御心の流露であつて、『いねにけらしも』の一句はまさに古今無情の結句」と評しています。ところが、ごく最近の万葉集の注釈書では、この結句を、雌鹿に逢えて寝たのであるらしい。それに較べて私は一人寝の淋しさをかこつが云々。と解するようになりました。たとえ萩が歌われていなくとも、夜鹿が鳴くのは相手を求めるためだと決めてしまふのは、万葉人の古い季節の捉え方として観念形態或いは、その形成の過程の影響によるものと極めてかかる結果です。でも鹿の習性に直接触れば触れる程、雌鹿も鳴く筈ですし、鳴く理由もいろいろでしょうし、勿論鳴かない夜があつても不思議ないはずで、勿論雌鹿に逢えて寝た場合もあつたでしょうが、この歌の異伝歌に、「夕されば小倉の山に伏す鹿はと、鳴くが伏すに変わつています。今宵は鳴かずい寝にけらしも」があります。この歌になりますと、狩人に狙われている鹿が、今宵は鳴かずと、生存の安否を歌っている、こんな場合すらあるのです。どうしてこんな中で、妻に逢えて寝た場合だけに拘わり、この天皇は注目した事になるのでし

ようか。これでは天皇の品格が限りなく小さくなり、歌柄も破壊されてしまう事になります。茂吉の評の如く、例え妻に逢えて寝た場合もあつたとしても、もつとおおらかに扱うべきではないでしょうか。このように、観念形態も場合によっては、歌の解釈を左右する迄に力を發揮するようになってくるのです。個々には違いがありますが、観念形態が大体揃うのは、天平頃ではないのでしょうか。天平の歌の新しさは、この観念形態による作歌にあつたと言えそうです。詠歌対象の実態よりも、詠い出した歌の恰好の良さや表現を整える方に、より作者の関心が向けられるようになってきた点にあつたと言えます。万葉集は以上のように、冒頭に申し上げましたような素朴な、対象の景物から吸収した個々の具体的な季節と、暦法が施行され、徐々に暦という季節の規準で物を見る風習が普及し、季節の感覚を観念で把握、観念が一つのまとまりの形態となり、対象の景物がどうであつても、観念で詠む季節とが存在していたと考えます。

さて、平安時代になりますと、一〇世紀の初頭には勅撰和歌集が出現します。『古今和歌集』です。さて勅撰和歌集とは、律令社会が産み出した重大な文化事業、政治の成果の一つでした。あの源頼朝の武力にどんなにしても対抗できなかった後鳥羽天皇が企てた事は、絶対鎌倉幕府には真似できない政治上の成果として、誰もが異常と思える程の熱の入れようです。『新古今和歌集』を撰集しました。それ程の重大事だったので。勅撰集の

制定を思い立つた天皇は、まず、しかるべき撰者に勅命を下します。古今集の場合は、紀貫之達は、あまりにも身分が低過ぎましたので、兼覧王という惟喬親王の皇子を仲介者として、勅命は伝えられたと、以前私は考えました。とに角、撰者は、勅命によつて出来る限り多くの歌を集め編集にかかります。万葉集や既にありました勅撰詩集の分類・部立を参考にして、季節の歌・恋の歌・雑の歌に、大きく三つに分けることに致しました。しかし、長歌が衰退した事もあつて、挽歌は、大きな部立からは除かれました。又、万葉集の幾つかの巻に見られる天皇の治世の年代順に歴史的記録とする体裁も取りませんでした。和歌が色好みの家に埋もれてしまつては、この編集はもう無理だつたと思われまふ。さて季節の歌は、集めて更に四季別に分けてみますと、春と秋の歌は多数集まりましたが、夏と冬は、その五分の程しか集まりませんでした。そこで春と秋は、それぞれ上下二巻、夏と冬は一卷の六巻としました。次は、それぞれの巻の中へ、どのようにして歌を並べていくかという作業に取りかかつた筈です。当然、桜の花は桜の花で一まとまり、梅の歌は一まとまりに区分し、次は、どの順番に、区分したまとまり同士を並べていくか。実はこれが困難な作業だつたようです。二枚目から三枚目にかけてのプリントの表は、八代集のそれぞれの勅撰集についての、この編集作業の結果を推定したものです。八代集全体を同じ規準でまとめられたものとなりますと、適当なものが見当たりません

ので、随分古いのですが、風巻さんが、女專、今の長野県短期大学に勤めておられました頃お作りになられたものを借用させていただきますました。古今集はなんといつても最初で完全とは行きませんでした。新古今集迄、いや一三代集最後の新続古今和歌集迄ですが、こうして歌の題材を社会の正式な公文書に記載したという事は、三ヶ月間の春とか夏とかの枠の中へ、具体的に季節感とか内容を公式に表示したことになります。この段階で、最初に申し上げましたそれぞれの春、それぞれ対象にする景物から吸収する個々の夏は、残念ながら否定され、以後世の中で通用しなくなりました。その結果「春が来た」といえるのは、それ自体何の实感もない立春を意味し、それ以外の場合は言えなくなりません。その上、暦の春・夏・秋・冬は、現実の自然とは約一ヶ月もずれています。例の柳田国男が『雪国の春』で指摘した通り、立春の頃は、まだまだ寒い盛りです。そこで勅撰和歌集には、言い訳の季節歌が、うんざりする程詠まれることとなりました。謂わば、勅撰和歌集らしい歌とでも言つたらいいのでしょうか、季節の到来を慶ぶ訳でもなく、季節感の発見でもない、実に不思議などにも通用しない内容の歌です。二枚目最初のプリントをご覧下さい。「春や迅き花や遅きと聞き分かん鶯だにも鳴かずもあるかな」。暦の春の来るのが早過ぎたのだからか、それとも花の咲くのが遅いのか、聞いて確かめたい鶯迄もまだ鳴かないことだ。ここには暦と現実の春の景物とのズレが決定的な現

象として歎かれています。観念形態の世界が万能とする前提があつて初めて詠える歌だと言えるでしょう。次は「秋来ぬと眼にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」。秋がやつて来たという目にははつきりと見えないけれども、風の音でそれとハツと気づいたのだ。この歌は「秋立つ日によめる」とありますから、これも間違ひなく、暦の上ではもう秋になつたのにとの言い訳です。京都は盆地で、夏は蒸し風呂の中のように暑く、風もないという観念の上での歌です。ところが、庭の木立の梢が、夕方でしょうか、僅かに揺れて風の吹く音がしたというのです。作者、藤原敏行は、風が吹くは秋、とこれも観念の上で決めていたので、この名歌が生まれました。風が少し吹いても、秋が来たと解釈して、秋の訪れと感じ取つたのです。謂わゆる小さな秋見つけたという歌です。佐藤八チローのラジオ歌謡の生みの親と言える歌です。勅撰和歌集の撰者は、二ヶ月近くも現実の自然と暦とに喰ひ違ひがあり、その上同一の観念形態で詠まれた、表現や内容の類似した歌を、こうして一首一首色々に並べようとする工夫が必要だつたのです。春とか夏とかの枠の中へ、どのように配列するか、大変な努力を払う事になります。まず、歌材をどの順番にするか、梅や桜の歌のように、同じ歌材の歌が数多い場合、歌をどのように並べたらよいかという難題が、のしかかってくる。この時、勅撰集の撰者は、暦法を基盤とする公文書の性格から、季節の景物の姿や美しさよりも、その移り変わりの方に敏感となり、

まず歌材の順序を決めにかかります。しかしこれが簡単にいかなかった事情は、以後の各集が、何よりも『古今集』を一生懸命規範と仰ぎながら、どれ一つとして『古今集』と同じ集がないという一事からでもお判りいただけると思います。又同じ歌材を並べる場面も、桜なら咲き始めから、推移の観点で散り終わる迄の順番で歌を並べるのが基本です。でもどの集でもどの集でも同じでは差が無いといましようか、撰者の個性は現れません。これは私が、以前『千載集』について、この点を考えてみた事があります。それを使って、この辺の事情をお話しさせていただきますと、例えば鹿の歌二〇首について、私の分析によれば、『千載集』では音の世界を様々に効果的に使うという特徴が撰者俊成によって貫かれます。即ち、寂しい秋風の音に混じって、歌を詠み進めるにつれ、野や山の彼方から哀切極まる鹿の鳴き声が聞こえて来ます。その声がだんだん身近になり、妻問う声である事が判つて来ます。次もやはり千載集での新しい試みですが、湊川・猪名の湊・明石の瀬戸と名所の歌を並べ、鹿の声のする場所を地域的に拡大します。野山は前の時代の歌人、対して川や湊を詠うのは現代の歌人で、然と鹿の声を聞く歌を配列します。鳴き声を、悲しともあはれだとも歌い、夕・夜・明け方そして夜と、時刻の明らかな歌を次々と詞の縁や詠み振りの類似で並べ、人間世界の恋の情緒を纏わらせて歌境を盛り上げ、やがて稲葉を渡る秋風の音の中へ鹿の声を消え去らせる。このように撰者の俊成は、

前の『金葉集』『詞花集』で数を大幅に減らしていた鹿の歌を、逆に大幅に二〇首も採り入れて、以上のような推移と変化を展開させています。こんなふうには、当代一の感覚の持ち主が、公式の場で、春・夏との大きな季節の枠の中へ、しかも観念形態の範囲で可能な様々な季節の感覚を豊富に盛り込むのです。このように感覚の多様化と拡大をはからなければ、この閉息の世界は滅亡消滅の途しがない事になります。話を元へ戻しますと、勅撰集は観念形態の全てが集められ、構成されているわけですから、その時代考えられる最高の日本の四季の観念が政府によって公示された事になります。これは、一方では勅撰和歌集に登載された景物だけが、詩歌に詠んで良い自然・詠歌の対象だという事になつてしまいました。逆に登載されないような景物は、歌に詠んではいけないという規制として働く事になりました。鹿は、今触れませんでしたように歌になる雅なものですが、狐や狸、熊は歌にはならない俗な動物となります。駒は歌になりますが、牛や犬、猫は駄目、梅や桜は歌になりますが、梅より早く咲く、万作・水仙・辛夷は無視されることになりました。昔の季節の歌は、自然の景物に接し、そこから生き生きとした自然の感覚を摂取して歌われました。万葉後期になつて、観念形態が現れてからも、観念形態というフィルターを通して、やはり自然は見えていたと思われまふ。ところが、こうした勅撰和歌集の登場により、王朝の歌人は、まず勅撰和歌集にどのように歌われているかが大問題で、

これが詠歌を詠む出発点と変わってしまいました。それもそれぞれ三ヶ月という枠組みの中で、現れる順序も明示されていますから、どうしても歌う内容や姿勢は、時の流れ・季節の推移にこれ迄以上に眼が向けられるようになりました。では、プリントの表をご覧いただきますと、実は山吹と藤のように、集によって順序が入り替わっている場合も有りで、一定しておりません。そればかりか、撰者の組み立てた自然の推移は、実際の季節の運行とは幾つも喰い違いを見せています。勅撰集は後になる程、その誤りが、自然の運行によつて絶えず訂正されようとする基本的な傾向は認められます。更に又、歌そのもの場合も、例の鶯のように全く現実離れの観念形態による場合は、いかに内容がすばらしくても、採択歌数を少なくするとか無くするとかの方策を取つて、より完全な日本の現実の自然に近付けようと勅撰和歌集の自然は構築されました。ところが、これは予想以上に難しい事だったのです。『古今集』について、実際と喰い違つている配列の順番を見ましましょう。まず梅の順番が問題です。梅は、『万葉集』の巻一・巻二には見当たりませんが、白梅が我が国に八世紀初に渡来し、紅梅は百年以上遅れて中国から渡来したと言われています。ですから『古今集』の場合、文句なく白梅を指します。すると、開花は二月二四日、三月一二日に満開です。すると、鶯が鳴き出す三月四日とは大きく喰い違つています。呼子鳥が郭公だとしますと、五月一五日に鳴き始めるので完全に

夏の鳥です。又、藤が咲き出すのは、四月二五日です。それに對して逆に、山吹の開花は四月一九日です。この辺りが、自然の実態と較べて問題がありそうです。ところが、この藤・山吹の順序は、『金葉集』以後修正されます。例の藤ですが、『金葉集』以後に顔を出しますが、いずれも冒頭に採り上げました志貴親王の「石走る」の歌に影響された歌で、春の到来を歌つていますが、名歌の故でしょうか。例外で、当初は大分、立春から隔たった順番に位置付けています。しかし無理し、他の歌材とは逆に、千載新古今とだんだん立春に近付けて来ます。そして『新古今集』では「石走る」の歌そのものが収録されます。そして梅よりもかなり早く立春並みの扱ひとなつてゐるのは注目されます。この現象は全く例外で事実離れとなつてゐます。しかし大勢は、勅撰和歌集の季節の推移は、次第に実際の自然によつて修正が重ねられました。時鳥の場合も、五月一二日には渡来しています。五月五日が立夏です。ですから夏の鳥には間違いないのですが、蕨の場合と事情は同じで、「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」という名歌を持っています。しかもこの歌は、平安時代実に多くに歌人に好まれ、本歌として数多く使われてもいます。そこで、実際の時鳥は、旧暦で四月一〇日頃から鳴き出し始めるにもかかわらず、歌に登場するのは、五月待つと決められておりました。『和泉式部日記』では、四月中に鳴く時鳥と、五月一日以降に鳴く時鳥とは、鳴く意味が違つと、変な理屈を付けた

りしています。『古今集』の中にも「五月来ば鳴きもふりなむ時鳥まだしき程の声を聞かばや」五月になつたら鳴く声が耳馴れてしまふ。時鳥よ。まだ鳴く時節にならない四月の内の未熟な声を是非聞きたいものだ。というのが見当たります。このようにこの勅撰集の中に、日本の四季の全貌を構築するという事は、基本的に、自然の事実との矛盾を解消し、有りのままの推移運行を公示することでありました。歌の上でそれをしようとする、名歌が醸し出す詩的イメージは強大で、イメージといひまじりか觀念形態がここでは最優先される為どうしても、單純に有りのままに、という訳にはいかないという実情がありました。先にも申しましたが、一方、鶯が春一番に山から飛来するとか、立春の日東風が一斉に氷を解かす等の、現実離れた觀念形態の歌は歌数が次第に減少し、淘汰されるというケースも見られます。撰者はすぐれた歌を撰ぶことと共に、それをどのように編集し、より豊かで多彩な、そして現実に近い四季の、現代の言い方をするならば、バーチャルリアリティの日本の自然を作り上げようと努力に努力を重ねていたと想像されます。恋の歌・雑の歌についても同じような編修が全部出来上がりまふと、撰者は、下命された天皇の御前で奏上します。『古今集』の場合は、先に申し上げました兼覽王が、眞之達に代わつて、兼覽王の立場での敬語使用で、うやうやしく奏上します。「ふる年に春立ちける日よめる。作者は、在原元方。年のうちに春は来にけり」と、歌の部分は、

現在のお歌会始めのように、節を付けて朗唱致します。次と区切つて、又「春立ちける日よめる。作者は、紀貫之、袖ひぢて」と朗唱します。大分時間がかかります。恐らく一時間位、こうして最初から披講されたと思われまふ。そして省略された部分は、巻物に消書された書物を献上して、受納されるという事で、一応作業は完了となります。この場合でも、読み上げる本と、献上する本の二部は必要となります。披講の結果、勅撰集として受納されると、天皇の蔵に収められてしまひますので、読み上げた本だけが、歌人の手元に残されます。こうして此の時の勅撰和歌集の内容は、歌人間にも正確に知られ、広まつていきます。ここに採択された歌材や詠法のみが公式に雅・みやびと認められました。歌つてもよい自然と認知されました。当時の歌人は、季節の歌を詠もうという場合、先ず勅撰和歌を見なくてはならなくなりました。そして皆この見方で自然に接するのが雅であり、外れると俗という事になったのです。こうなると、自然そのものが、雅びな自然と俗な自然とに二分され、むしろ自然の方から、勅撰集の描き出す自然の四季に接近して行つたとさえ言えます。だんだん私達は、皆が一樣に大自然の中の、ごく一部の自然だけを、それも対象の一部分だけを特別な見方で、だけ愛でる習慣を身につけ、推移の感覚で味わう事になっていくことになりました。後年の事になりますが、例の吉田兼好が、日本の自然を「折節の移り変わるこそ物毎にあはれなれ」と把えて見せましたが、こ



うした見方が至り着いた究極の名言だと思われます。

以上、私達日本人は、万葉の昔、既にすばらしい自然の味わい方季節の受け留め方を身に付けていました。自然の限らない恵みを、物質面だけでなく、精神面でも量り知れない程の豊かさで受け取っておりました。それが万葉の後半から平安時代になりますと墜落とも見られる、観念形態のフィルターを通してしか自然に触れようとしなくなりました。このようにして万葉の歌から平安時代の歌へと、和歌の詠風が大きく変わったのだと、変わりました理由の一端を、季節の歌の詠み方の面から、あれこれ考えてみた次第です。

長い時間、拙い、浮世離れなお話で、お耳を汚しましたが、ご静聴下さいまして、皆さん本当に有難うございました。これで本当に終わりとさせて頂いたできます。

(たきざわ さだお 信州大学名誉教授)